

稀な血液型不適合による核黄疸発症について

(分担研究： 核黄疸の予防に関する研究)

竹 峰 久 雄,* 会 田 道 夫

要 約

兵庫県下産科医療機関(診療所及び病院)423施設,小児科医療機関(病院)54施設を対象としてABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患の実態調査を行った。産科医療機関からは308施設(72.8%),小児科医療機関からは52施設(96.3%)の解答があった。その結果昭和57年から61年の5年間にABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患27例の症例があった。内訳はD10例, E7例, E+c4例, C+e, -D-, c, Di^a, M, Jr^a, が各1例であった。妊娠中に不規則抗体の検査を受けた症例は出生早期に治療開始されていたが,受けていない例(12例)では入院時ビリルビン値が25mg/dl以上の例が6例もあり治療開始が遅れる傾向がみられた。しかし27症例には脳性麻痺,死亡例はなかった。一方妊娠中の不規則抗体の検査を実施している産科医療施設は特定例のみ対象にしている機関が33.1%,全妊婦を対象とするところはわずか5.9%であった。不規則抗体発見率は特定例のみの機関が18.6%に対して全妊婦を対象とした機関では66.7%と高率であった。

見出し語： ABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患,重症黄疸,不規則抗体

研 究 方 法

兵庫県下産科医療機関423施設,小児科医療機関54施設を対象としてABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患についてアンケート調査を行った。調査対象期間は昭和57年1月より昭和61年12月までの5年間である。解答は産科医療機関308施設(72.8%),小児科医療機関52施設(96.3%)から得られた。調査日時は昭和62年9月である。

結 果

小児科医療機関が5年間に経験した症例はD10例, E7例, E+c4例, C+e, -D-, c, Di^a, M, Jr^a, の各1例の計27例である(表1)。この調査対象期間の総出生数は約32万人で,計算上の

発生頻度は出生12000人に1人である。解答のあった52小児科医療機関で該当症例を経験した施設は14施設(26.9%)に過ぎなかった。

妊娠中に不規則抗体の検査を受けた例は15例で,うち14例は院内出生児であった。この14例はいずれも出生直後に小児科管理となり,出生直後より治療対象となっていた。一方不規則抗体の検査を受けていない例12例中院内出生児はわずか3例に過ぎず,入院日齢も生後0日の入院は4例で,残りは1日から5日の入院であった。また入院時血清ビリルビン値も20~25mg/dlが2人,25mg/dl以上が6人と高値を示した(表2)。

調査27例には脳性麻痺例や死亡例はなかった。

* 兵庫県立こども病院新生児科
(Dep. of Neonatology, Hyogo Children's Hospital)

産科医療機関で妊娠中の不規則抗体の検査をしていない施設が188施設(61.0%)、特定例のみ102施設(33.1%)、全妊婦に実施している施設は18施設(5.9%)であった。不規則抗体の発見率は特定例のみ実施機関は18.6%、全妊婦対象機関では66.7%であった。(表3)

考 察

大西ら¹⁾は昭和60年度厚生省班研究において最近3年間に33例もの成熟児核黄疸例を報告し、その多くはABO不適合やRhD不適合以外の血液型不適合による溶血性疾患によるものとした。昨年筆者ら²⁾は昭和55年から61年の期間に学会報告や文献となった当該症例は91例にのぼり、このうち死亡(胎児水腫)4例、核黄疸4例であり、妊娠中に不規則抗体の検索が本症例の早期管理に必須条件であることを報告した。

そこで今回は妊娠中に不規則抗体がどの位実施されているか、またABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患がどの位の頻度で発症しているかを兵庫県を対象としてアンケート調査を行った。

その結果ABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患の発生頻度を出生数当りに換算すると12000人に1人であった。RhD不適合はその発生予防対策が充分講じられていると考えられる現在でも10例発症していることは意外であった。Rh垂型不適合がグループ別では1位で14例、次いでRhD不適合、その他の血液型不適合が3例であった。

今回の調査で最も注目すべきことは妊娠中不規

則抗体の検査の有無であった。実施されていない症例では児が重症黄疸になってはじめて治療が開始されている。これら血液型不適合溶血疾患では早発黄疸、重症黄疸化するのが特徴であるから事前に判っていなければ、このような結果を招くことは当然の帰結といえよう。対照的に妊娠中不規則抗体の検査を受けた症例は早期治療が行われ、黄疸も極く軽度の時から管理されている。

産科医療機関においてこの不規則抗体を検査している施設は未だ数少ない。これはABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患に対する産科医の理解度の低さを示すものとも受けとれる。全妊婦を対象として不規則抗体を検査している施設の2/3では不規則抗体を母親に発見している。今後この検査を実施徹底すればもっと数多くの症例が見出され、しかも出生前から児の病状が予測できるので、早期発見早期治療が可能である。この不規則抗体検査は核黄疸予防の面から考えて是非遂行すべき検査と考える。

文 献

- 1) 大西鐘壽ほか：新生児黄疸の実態調査，昭和60年度新生児管理における諸問題の総合的研究，P 445，厚生省心身障害研究新生児管理班
- 2) 竹峰久雄ほか：稀な血液型不適合による核黄疸発症について，昭和61年度新生児管理における諸問題の総合的研究，P 131，厚生省心身障害研究新生児管理班

表1.

ABO不適合以外の血液型不適合
(兵庫県52病院・5年間)

D	10
E	7
E+c̄	4
C+e	1
-D-	1
c̄	1
Di ^a	1
M	1
Jr ^a	1
計	27例

表2.

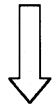
入院日齢	妊娠中抗体検査		
	有	無	
0日	14 (14)	4 (2)	
1日		3 (1)	
2日	1	3	
3日			
4日		1	
5日		1	
入院時 ビリルビン 他	0~10mg	14 (14)	2 (2)
	10~20mg	1	2 (1)
	20~25mg		2
	25~30mg		5
	30mg以上		1

() 内は院内出生児数

表3.

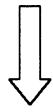
妊娠中の不規則抗体の検査

診療所	$\frac{83}{250} = 33.2\%$
病院	$\frac{37}{58} = 63.8\%$
全体	$\frac{120}{308} = 39.0\%$
していない	188 61.0%
特定例のみ	102 33.1%
全妊婦に	18 5.9%



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

兵庫県下産科医療機関(診療所及び病院)423 施設,小児科医療機関(病院)54 施設を対象としてABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患の実態調査を行った。産科医療機関からは308施設(72.8%),小児科医療機関からは52施設(96.3%)の解答があった。その結果昭和57年から61年の5年間にABO不適合以外の血液型不適合溶血疾患27例の症例があった。内訳はD10例,E7例,E+c4例,C+e,-D-,c,.Dia,M,Jra,が各1例であった。妊娠中に不規則抗体の検査を受けた症例は出生早期に治療開始されていたが,受けていない例(12例)では入院時ビリルビン値が25mg/dl以上の例が6例もあり治療開始が遅れる傾向がみられた。しかし27症例には脳性麻痺,死亡例はなかった。一方妊娠中の不規則抗体の検査を実施している産科医療施設は特定例のみ対象にしている機関が33.1%,全妊婦を対象とするところはわずか5.9%であった。不規則抗体発見率は特定例のみの機関が18.6%に対して全妊婦を対象とした機関では66.7%と高率であった。